

vol. 27

## 風の女神

2019年初夏の小豆島。私は自転車  
を飛ばしてアンダルシアから来たとい  
う1本の木に会いに行った。海を見下  
ろす高台、円卓のような輪の中に立つ  
樹齢1000年のオリーブの大樹。日本  
に来て8年。1000年前のアンダルシア  
を知っていると思うとほろほろと。  
誰もいなかったで、そっとロマンセ  
をかけてみた。五月の風がざわりざわ  
りと枝を揺らして行く。ここ、野外タ  
ブラオにできたらしいのに。妄想する  
目の奥で、ある人が踊り始めた。

ロマンセに恋をして、それがオリ  
ブと結びついたきっかけは、アルテ  
ソレラが2005年にヘレスで公演した  
『歓喜』のDVDだった。暗がりの中、  
柏麻美子さんの足音がコンパスを  
夜明けのような明かり。レプリハの  
血を引くアントニオ・デ・ラ・マレー  
ナの声が響き渡る。

「ya la verde verde,  
ya la verde oliva…」

麻美子さんの髪にも花ではなくて緑  
の葉。このプロローグが終わるとタバ  
に乗り、舞台の上下から密林の動物た  
ちのような衝動を漲らせて権弓美さん  
と多田美和さんが現れる。鉄火肌の  
娘たち。牧歌的な若者たち。叙情的な  
恋模様から生命の祝祭へ。マテオ・ソ  
レラ、アントニオとマヌエル、クロー  
デ・ヘレス、マレーナ・イーホ、サンテ  
イアゴ・モレーノ、ルイス・デ・ラ・トタ  
らがつくり出すうねりが、囁きほどに  
滲み出る旨みを持って物語を運ぶ。価  
値観や好みが変化した今も、この作品  
への憧れは色あせることがない。

でも土地の匂いへのこだわりを求め  
られるためか、ロマンセは踊られる機  
会も少なく、歌える人も限られていて  
なかなか観られず。そんなある日、私  
は出会った。小林泰子さんのロマンセ  
に。気高さと肝っ玉を兼ね備え、この  
曲が心底好きな人にしか出せない香り

を立ち上らせて。嬉しかった。そして  
それは同時に、自然を感じさせてくれ  
る踊り手に出会えた日でもあった。長  
くしなやかな手足、たっぷりとコンパ  
スを剣でいく様は、まるで大きなオ  
リーブの木が風に揺れるよう。その後  
も泰子さんのいろいろな踊りを観てい  
るけれど、やはり見えなはずの自然  
が見えてくる。どうしてだろう？

泰子さんがSNSに上げた写真には、  
その答えの片鱗が見える。海、緑、空、  
色、光、風(ときどき猫?)。中でも返  
子海岸で娘の彩さん(いま13歳)が撮



@Aya Sasaki

った写真は、ため息が出るほど美しか  
った。風の女神。構図も素晴らしい、  
本当はこの写真にまる1ページさき  
たいほど。

「夕方、もう帰ろうっていうとき、な  
んかすごくリラックスした気分で、ふ  
っと踊りたくなったんです。そしたら  
娘が撮ってくれて」

和己

も

歩けば...



【樹齢1000年のオリーブ樹】  
2011年3月12日、震災の翌日に倒壊し、  
平和の祈りとともに植樹された。

フラメンコ

の

森で

文/白石和己 *Texto por Waki Shiraishi*

海から森へと吹く風に髪をなびかせ、光を受けて、豊かな大樹と化す  
人がいる。フラメンコが成熟するのはフラメンコと直接接していると  
きだけではなく。サバトスを脱ぎ、自然とつながる時間に、磨かれる  
ものもあるかもしれないというお話。

そして「この日以降かな、自然の中で踊りたいって、より強く思うようになったのは」と振り返った。だとしたらこれは、大切な何かが目覚めた日。

でも記憶をたぐると、私が泰子さんの踊りに風を感じたのはこれより前だから、自然と引き合い、溶け込もうとする何かは、泰子さん自身が気づく前から、ずっとその体の中にそよいでいたのだと思う。

泰子さんは子供時代を、千葉と福岡で過ごした。小学校1年から4年までいた福岡では、家の裏が田んぼ、その畦道を通して友達に会いに行く日々。また登山が好きだった父親の影響で、山にはよく出かけていたから、そのころから自然の中に行くことが生活の一部になっていたのかも、と泰子さん。その心はやがて海へと向かう。

「20代のところからひとりで島に行ったりしてなんです。八丈島までいきなりひとりで旅をしたこともあります。地元の人に心配されちゃって(笑)。若い女の子がひとりでこんなところに来て、何があったんかって」

30代になり、沖縄の海と出会った。その鮮やかな色に、光に、強烈に惹かれた。こんな青が好き、と見せてもらったその色も、輝く海の色だった。

でも舞台で踊るときは「とくに自然の景色をイメージしたりはしていないかな」と泰子さんは語る。

「どちらかというと歌やギターに集中しているの。ただ、音楽や踊りの中に感じる、鳥がぼつと飛び立つ間合いとか、風がふわって巻き起こる感覚とかは、自然からもらっているかなと思います。波が寄せては返す、その押し引きも、コンパスの中に存在するし。



©Aya Sasaki

いろんなアーティストたちもそれぞれの言い方でそういう話をするから、特別なことではないかもしれないけど」

ふと、トロンボのクルシージョを思い出した。スクリーンに過去の巨匠たちを「この人のセンセイ」「この人のセンセイ」と遇って映し出し、最後に「yセンセイ」と言ってドンと出したのは、緑っぱいの自然の写真だった。先人たちの行き着くところ、最大の師、それは水であり、水であり。

私たちは踊りや音楽を自然と分けて考えてしまいがちだけれど、もともとは自然にインスパイアされて生まれたもの、人も自然の一部なのだと思います。そういえば泰子さんは、自然の中にいるように、舞台にもいる。風や光を受けるように、音楽を受け、対話を始める。どんな歌がどう来るのか、どんな展開にするのか、気を張っているかもしれないけれど、空もまた刻々と色を変え、次に起こることは誰も予測はできないのだ。

大好きな沖縄は頻繁に行くにはさすがに遠いので、時間を見つけては逗子へ。でもコロナの影響でそれも叶えられなくなってしまい、それならと家の近くの緑豊かな公園へ。「セビジャーナスつなぎ」もそこで撮影した。「どうしてそんなに自然の中に行きたいのか、自分でもわからない」と泰子さんは笑うけれど、だとしたら、何か見えないへその緒のようなものを伝わって、自然が泰子さんを呼んでいるのかも。「気になる言葉があった」と泰子さんは映画「ドルフィン・マン」のパンフレットの中で、自然写真家の高砂淳二さんが引用したジャック・マイヨールの言葉を紹介してくれた。

「人には2つ役目があって、ひとつは愛を学ぶこと。もうひとつは、植物や生き物などの自然が、ちゃんとバランスをとって生きられるように見る役目がある」

そんな泰子さんのロマンスを私はやっぱりあるオリーブの前で観てみたい。でも、「いつかイルカと泳ぎたくて。言葉のないコミュニケーション、フラメンコにも通じそう」という夢が実現するなら、その泰子さんも見てみたい。

コロナの恐怖が去ったら、心惹かれるまま、自然の中に出かけてみよう。眠っていたものが目覚め、観るにせよ踊るにせよ、何かが無くなるかもしれないから。ただ、もし小豆島にオリーブを見に行くなら、自転車は電動を借りるべし(とても長い登り坂です)。そして逗子海岸に来るならば、日焼け止めを忘れずに！(本陰とか岩陰というものが無いので)

運が良ければ、夕陽に踊る、風の女神に会えるかな。



©Aya Sasaki

#### 白石和己

童話作家、随筆家。東京生まれ。聖心女子大学英文科卒業後、イギリス留学。広告会社を経てフリーに。著書「五十嵐文男の華麗なボディキュアスケート」(新書館)、「京都 鮎と花の旅」(樞書房)、「さくらまつ一夜が明けたら」(銀の鈴社)ほか

